

目 次

第 1 部 規則性と変則性のあいだ

第 1 章	日本語母語話者による英語メトニミー表現解釈における 知識と文脈の役割.....	有蘭智美	3
第 2 章	レトリックの認知構文論 ——効果的なくびき語法の成立基盤——.....	小松原哲太	25
第 3 章	創造的逸脱を支えるしくみ —— Think different の多層的意味解釈と参照のネットワーク——	鈴木 亨	47
第 4 章	母語話者の内省とコーパスデータで乖離する容認度判断 —— <i>the reason... is because...</i> パターンが妥当と判断されるとき——	八木橋宏勇	71

第 2 部 認知意味論の諸相

第 1 章	生物の和名・俗名における意味拡張.....	永澤 済	93
第 2 章	百科事典的意味の射程——ステレオタイプを中心に——.....	粕山洋介	115
第 3 章	現代日本語における名詞「名」の多義性をめぐって.....	野田大志	137

第 3 部 構文論の新展開

第 1 章	英語の接続詞 when ——「本質」さえ分かっているれば使いこなせるのか——.....	平沢慎也	161
第 2 章	打撃・接触を表す身体部位所有者上昇構文における 前置詞の選択—— hit を中心に——.....	野中大輔	183

第3章	日本語における使役移動事象の言語化	
	——開始時使役 KICK 場面を中心に——	古賀裕章 203
第4章	英語における中間構文を埋め込んだ虚構使役表現について	
		本多 啓 231
第5章	主要部内在型関係節構文の談話的基盤	野村益寛 253

第4部 認知言語学から見た日本語文法

第1章	再帰と受身の有標性	長谷川明香・西村義樹 275
第2章	再帰代用形「自分」と Image SELF	
	——言語におけるリアリティをめぐる——	井川壽子 299
第3章	非情の受身の固有性問題——認知文法の立場から——	張 莉 321
第4章	日本語受身文を捉えなおす——〈変化〉を表す構文としての受身文——	
		田中太一 343

第1章

日本語母語話者による英語メトニミー表現
解釈における知識と文脈の役割

有蘭智美

キーワード：メトニミー，比喩解釈，外国語，知識，文脈の手掛かり

1. はじめに

認知言語学における比喩研究の成果は，外国語教育・学習における比喩研究に応用されており，特にメタファー表現の理解・記憶については盛んに研究が行われている。一方で，外国語学習におけるメトニミーの理解については，その必要性が指摘されながらも，メタファーほど研究が進んでいないのが現状である (Low 2008, Barcelona 2010)。本章ではまず，第2節で外国語における比喩解釈に関する先行研究を概観したうえで，第3節で日本語母語話者による英語のメトニミー表現の解釈に関するインタビューデータを基に，外国語のメトニミー表現の解釈がどのように行われているかを示し，解釈の可否に関わる要因を明らかにする。また第4節では，第3節で示したメトニミー表現の解釈データの中でも名詞転換動詞に焦点を当て，日本語母語話者を対象にした，ある名詞から想起される行為についてのアンケート調査の結果と照らし合わせて，当該項目に対して持つ知識とその表現が用いられる文脈が，適切な解釈をどのように促進・抑制しているかについて観察を行う¹。

2. 外国語の比喩解釈

外国語学習における比喩の処理能力として問題になるのは，理解・記憶・産出であるが，これまでの研究は，とりわけメタファーの理解と記憶に関す

¹ Cruse (2011: 121) は，話し手と聞き手，書き手と読み手の関係や，談話の参加者がその場で見たり聞いたりできる言語表現以外の情報などを含む，5つのタイプの文脈 (context) を挙げている。本章ではそのうち，前後の文や当該表現の直前直後に現れる語彙や構造，つまり，狭い意味での文脈 (linguistic context) を指す。

第2章

レトリックの認知構文論

——効果的なくびき語法の成立基盤——

小松原哲太

キーワード：認知図式，多義性，等位構造，際立ち

1. はじめに

認知言語学は、隠喩や換喩などのレトリック (i.e. 修辞) を、言語学の中心的な考察対象の1つに押し上げた (Lakoff 1993, Panther and Radden 1999)。レトリックは意味論に関係する現象であるともなされることも多いが、文法形式の機能や構文的な使用環境を考慮しない限り、その表現効果が説明できないようなレトリックの現象が存在する。本章では、日本語の「くびき語法 (zeugma)」の成立基盤の分析を通じて、レトリックの表現効果が、主観的で恣意的な読み込みから生まれるのではなく、慣習的な語彙と文法を複雑かつ創造的に組み合わせることから生まれることを示す¹。

第2節では、くびき語法の基本的な性質を概観し、第3節では、認知文法の理論を背景として、効果的なくびき語法の成立条件を考察する。第4節から第7節では、くびき語法の用例のバリエーションを記述し、第3節で示す成立条件の有効性を考察する。第8節はまとめである。

2. くびき語法

認知言語学ではくびき語法をレトリックとして考察する研究は多くない

¹ 本章では認知言語学、特に認知文法のフレームワーク (Langacker 1987, 1991) にもとづき、文法は本質的に記号的 (symbolic) であるという立場から、語彙と文法は、形式と意味の対からなる構文 (construction) の連続体をなすものとみなす。認知言語学を理論的基盤とし、構文の観点からレトリックを研究するアプローチを、本章では、レトリックへの認知構文論的アプローチとよぶ。本章の考察は、このアプローチによる事例分析の1つとして位置づけられる。

第3章

創造的逸脱を支えるしくみ

— Think different の多層的意味解釈と参照のネットワーク —

鈴木 亨

キーワード：創造的逸脱，属性評価文，拡張，混交，参照のネットワーク

1. はじめに

1997年のApple社の宣伝広告で使われた“Think different.”という表現は、標準的な英文法の体系に照らして見ると幾分逸脱的な表現である。動詞 think と形容詞 different の関係が文法的に不透明なのである。Steve Jobs の公式評伝である Isaacson (2011: 329–330) によると、広告案の検討段階では、当該表現の文法性について種々議論があったことが記されているが、注目されるのは Jobs 自身がこの different は differently の代用ではないと認識していたということである。その一方で、この different は differently の間違いではないかという指摘と、それをめぐる賛否両論の議論があるのも事実である (Pinker 2014: Ch. 6 を参照)。

具体的には、活動動詞の think が、感覚動詞や結果動詞のように形容詞を補部とする用法は一般的ではなく、different を単に -ly の省略された副詞とみなすのも、語源の特徴などからすると不自然である (鈴木 2016)。

それにもかかわらず、この表現は英語圏ではそれなりに容認され、受容されつつあるように思われる。一見逸脱的な表現が創造的革新として受け入れられる背景には、どのような条件が必要なのだろうか。調べることでできた範囲では、think と different の組み合わせに最初に言及した英文法書である Wood (1981) に以下の記述がある (参照したのは 1981 年の改訂版であるが、初版は 1962 年)。

Think different, when it means not think in a different way but have different thoughts, is certainly correct:

第4章

母語話者の内省とコーパスデータで 乖離する容認度判断

—— *the reason... is because...* パターンが妥当と判断されるとき ——

八木橋宏勇

キーワード：母語話者の内省、構造的関連性、物理的距離、焦点、指示機能

1. はじめに

「正しい用法」とは何を意味するのだろうか。「正しくない用法」だと考えられる言語現象であっても、何らかの動機づけを持ち、正しいとまでは言えなくとも、妥当であると判断されることはあるように思われる。本章で扱う *the reason ... is because ...* は、一般的に非標準用法とされ、誤用であると断言している文献も散見される。総じて英語母語話者の内省でも容認度が低い。しかし、非標準用法であるとか誤用であるとされながらも、言語使用においては頻繁に観察されているのが実情である。つまり、英語母語話者の内省とコーパスデータでは、容認度判断に乖離が生じているということになる¹。

以下、第2節では、このパターンが母語話者の内省では容認度が低くなる2つの理由を論じる。第3節ではコーパスデータをもとに本パターンが好まれる文法的環境を提示し、情報構造や照応の観点から *because* と *that* の交替について議論し、最終節で今後の見通しを提示する。

2. 非標準用法ないしは誤用と判断される2つの理由

本章で扱う言語現象は、一般的に非標準用法あるいは誤用と考えられている *the reason ... is because ...* (以下、RB パターン) である。以下の引用に見られるように、標準的で正しい用法は *the reason ... is that ...* (以下、RT パター

¹ *the reason ... is because / that ...* のほか、*The reason being is because / that ..., the reason being because / that ..., Reason being, because ...* といった類似の用法も確認されている。したがって本パターンは、言語変化・表現のバリエーションが生成されるプロセスを明らかにするうえで、有益な言語資料となりうる可能性を秘めていると言える。

第1章

生物の和名・俗名における意味拡張

永澤 済

キーワード：生物，俗名，種属，メタファー，メトニミー

「……ところが夜だかは、ほんとうは鷹の兄弟でも親類でもありませんでした。かえって、よだかは、あの美しいかわせみや、鳥の中の宝石のような蜂すずめの兄さんでした。蜂すずめは花の蜜をたべ、かわせみはお魚を食べ、夜だかは羽虫をとってたべるのでした。それによだかには、するどい爪もするどいくちばしありませんでしたから、どんなに弱い鳥でも、よだかをこわがる筈はなかったのです。

それなら、たかという名のついたことは不思議なようですが、これは、一つはよだかのはねが無暗に強くて、風を切って翔けるときなどは、まるで鷹のように見えたことと、も一つはなきごえがするどくて、やはりどこか鷹に似ていた為です。もちろん、鷹は、これをひじょうに気に入けて、いやがっていました。それですから、よだかの顔さえ見ると、肩をいからせて、早く名前をあらためろ、名前をあらためろと、いうのでした。」

(宮澤賢治『よだかの星』)

1. はじめに

生物の和名や俗名は、近代自然科学で論理的に付された学名とは異なり、人間古来の素朴なものの捉え方を反映していて興味深い。

日本には「オジサン(オジイサン)」という和名の魚がいるが、これは2本のひげをもつ風貌を人間の「おじさん」になぞらえた名称で、類似性に基づく比喩、メタ



オジサン

第2章

百科事典的意味の射程 ——ステレオタイプを中心に——

靱山洋介

キーワード：百科事典的意味，ステレオタイプ，フレーム，慣習性，一般性

1. はじめに

本章は、語（等の言語表現）の多様な意味について、百科事典的意味の観点（百科事典的意味観）から考え、記述することの妥当性を、現代日本語の直喩やメタファー等の分析に基づき示すことを狙いとするものである。特に、百科事典的意味に含まれると考えられる基本的な事柄を概観したうえで、ステレオタイプについてやや詳しく検討する。

第2節では、本章での語の百科事典的意味の定義を示したうえで、百科事典的意味に含まれるものとして、語の意味の慣習性の程度、語の指示対象の特徴、語の意味の基盤となるフレーム、語の一般性の程度が完全でない意味について具体例に基づき説明する。

第3節では、語の百科事典的意味に含まれる、ステレオタイプが有する特徴に注目する。特に、ある特徴について慣習性は高いが一般性は低いという性質を有する典型的なステレオタイプに加え、一般性の程度がゼロであるという特徴が認められる場合もあること、さらに、ある特徴の慣習性が低いというステレオタイプの周辺に位置付けられる事例もあることを示す。

第4節では、本章のまとめを簡単に述べる。

2. 百科事典的意味とは

百科事典的意味観は、認知言語学において広く受け入れられている、言語の意味に関する広い射程を有する考え方であり、意味論と語用論は連続

第3章

現代日本語における名詞「名」の
多義性をめぐって

野田大志

キーワード：名，呼称としての言語記号，多義性，意味拡張，フレーム

1. はじめに

従来，事物の呼称としての言語記号は，言語学においては主に命名論の枠組みで研究されてきた。その中では主に，命名のメカニズム，命名の結果産出された様々な固有名の表現性や表示性¹の考察等が行われてきた。一方，個々の呼称としての言語記号の総称である名詞「名」，「名前」，「名称」等の言語形式に関して，その意味構造を詳細に検討した先行研究は管見の限り見当たらない。そこで本章は，これらの中で最も多義的な「名」を取り上げ，語レベルの意味構造を網羅的，体系的に記述する。また「名」の多義性の検討を通じ，呼称としての言語記号に関するフレーム²に迫る。

なお本章で「呼称としての言語記号」というメタ言語を用いるが，「言語記号」について，池上(1972, 1982, 1994)の規定に従う。池上(1972: 33)は，言語，モールス信号，交通信号，身振り，花ことば等「われわれの何らかの感覚によって感知可能な単位があり，それがわれわれにある種の情報を伝えてくれる。そのような時，われわれはその単位のことをふつう「記号」と呼んでいる」と規定する。また池上(1982: 40)は，「記号」を「記号表現」と「記号内容」の「相関体」と規定する。さらに池上(1994: 14-15)は，代表的な「記号」としての言語は，記号が当然備えているべき二つの側面，「語形」

¹ 吉村(1995: 202)は固有名の「表現性」を「そのものの独自の個性的側面を強調する機能」，「表示性」を「そのものの所属先カテゴリーを明示する機能」と位置づけている。また，森(2015)は米の品種名の考察を通して，この2つの概念の様相を精緻に示すものである。

² 本章は西村(2008: 80)の「与えられた言語表現の意味の成立に直接関与する百科事典的な(多くの場合コンテキストに依存する)知識のまとまり」というフレームの規定に従う。

第1章

英語の接続詞 when

——「本質」さえ分かっていたら使いこなせるのか——

平沢慎也

キーワード：when, 意味, 使用, 言語知識の単位, 解釈と産出

1. はじめに

私は、何故だか分からないが、英語母語話者が使うような英語を使えるようになりたくて仕方がない。英語研究はその個人的な目標のためにやっている。これとほとんど必然的に連動して、私が立てる研究上の問いの多くは「英語表現 X を英語母語話者が使っているように使えるようになるためには、何を知っていなければいけないのか」という形をとる。

何年か前に私は自分の when の使い方が下手であることに気がついた。自分で書いた英文や喋った英文に含まれている when は概ね日本語の「とき」に引きずられている。英米の文学作品や映画などを見ていて when が出てくると、その状況は自分が when を使おうと思わない状況であることも多い。だから、次の問いを立てた。when を母語話者が使っているように使えるようになるためには、何を知っていなければいけないのか。本章は、まず第一に、この問いに（部分的にはあるが）答えを出すための章である。

第二に、この問いに答える試みをしながら、何を「when の〈意味〉」と呼んだらよいのかという問題を提起したい。ここで言う〈意味〉は言語学の術語、専門用語としての〈意味〉である。もちろん、用語の問題は究極的には分析者（言語学者）の好み、選択の問題である（本多 2014: 37–38, 平沢 2017: 32–34）。だが好みの問題だからといって何をどのように定義してもよいというわけではない。〈意味〉ほど重要な概念を定義する際には、分析者の思う言語学の目標に密着しそれと連動するものとして定義する必要がある¹。

¹ 〈意味〉を重要な概念だと見なしている点で既に私の主観が入っていることは認める。

第2章

打撃・接触を表す身体部位所有者 上昇構文における前置詞の選択

— hit を中心に —

野中大輔

キーワード：身体部位所有者上昇構文，前置詞，コーパス，働きかけの方向，使用基盤モデル

1. はじめに

英語には，日本語の「ジョンがビルの頭をなぐった」に相当する表現として以下の2つが存在する。

- (1) a. John hit Bill's head.
- b. John hit Bill on the head.

このうち，(1b)のように身体部位の所有者を直接目的語として，身体部位を前置詞句として表現する構文は，身体部位所有者上昇構文 (body-part possessor ascension construction) と呼ばれている (Levin 1993, 影山 2011)¹。身体部位所有者上昇構文に現れる動詞についてはすでに研究があるものの，前置詞については十分に研究がなされていない。本章では，事例研究としてこの構文でもっともよく取り上げられる動詞 hit を選び，共起する前置詞 on と in がどのように使い分けられているかを分析する。

2. 身体部位所有者上昇構文の特徴

2.1 目的語および前置詞句に現れる名詞句

冒頭に挙げた (1a) と (1b) の意味は完全に同一というわけではない。あくまで特定の部位に行為を行ったことを表すにすぎない (1a) に対し，(1b) は

¹ この構文の名前は，(1a)のように所有格で表される身体部位所有者が目的語位置へ「上昇」することで (1b) の構文が派生されるという分析に由来する。本章ではこのような理論的立場は取らないが，Levin (1993) や影山 (2011) に従いこの名称を用いることとする。

第3章

日本語における使役移動事象の言語化

——開始時使役 KICK 場面を中心に——

古賀裕章

キーワード：使役移動，経路主要部表示型言語

経路主要部外表示型言語，ダイクシス，主語一致の原則

1. はじめに

本章の目的は、ビデオクリップを使った実験的データに基づき、日本語における使役移動事象の言語化を考察することにある。後に詳述するように、日本語における自律移動事象と使役移動事象の言語化を比較すると、特定の意味要素の表現頻度や表現パターンに大きな違いが認められる。このような移動事象のタイプに応じた表現の差異を生み出す通言語的及び言語個別的要因を浮き彫りにすると同時に、他言語との比較を通して日本語における使役移動事象の言語化の特徴を明らかにすることをねらいとする。

以下、第2節では移動にかかわる意味要素と、Talmy(1985, 1991, 2000)によって提案された移動表現の類型を紹介する。第3節ではデータについて解説し、第4節でそのデータに基づき、使役移動事象のうち特に開始時使役の KICK の場面に焦点を絞って、日本語におけるその言語化を詳細に分析する。第5節では結論を述べる。

2. 移動にかかわる意味要素と移動表現の類型論

まずは例文を参照しながら、Talmy(1985)にしたがって移動にかかわる意味要素を定義する。

- (1) a. 太郎が部屋に走って入ってきた。
- b. 太郎がボールを部屋の中に蹴り入れた。

空間において位置を変化させる移動物を図 (figure)，図の位置や移動を規

第4章

英語における中間構文を埋め込んだ
虚構使役表現について

本多 啓

キーワード：虚構使役，中間構文，主体変化表現，主観的变化表現

1. はじめに

本章は次のような使役動詞 make を含む文を取り上げて検討する。

- (1) a. This book is so complicated that it **makes** Tolstoy's *War and Peace* **read** like a Marvel comic book. (Web)¹

(この本はたいへん複雑な筋立ての物語で，これを読んだ後ではトルストイの『戦争と平和』がマーヴェル・コミックのように感じられるほどだ)

- b. Bad reviews **make** good ones **more credible**. (Web)²

(しょうもないコメントを見た後では，よいコメントがより一層信頼できるように思えるようになる)

これらは英語の母語話者に自然に受け入れられる文であり，一見普通の使役表現に見えるかもしれない。しかし精査すると，これらの文の奇妙な特徴が浮かび上がってくる。

(1a) は *Deathfear and Dreamscape* という 2011 年に刊行された本の推薦文に現れる文である。この文において『戦争と平和』には現実世界においては何も生じていない。すなわち『戦争と平和』の本文に変更が加えられて読み

¹ <http://www.amazon.com/Deathfear-Dreamscape-Frank-R-Freemon/dp/1449715540> / <https://books.google.co.jp/books?id=9TX5fOtGJXsC&pg=PA311>

² <http://www.yelp.com/topic/chicago-help-vile-slander>

第 5 章

主要部内在型関係節構文の談話的基盤

野村益寛

キーワード：主要部内在型関係節，継ぎ足し戦略，談話，複文

1. はじめに

日本語には主要部の占める位置によって次の2種類の関係節があるとされてきた(黒田 1976)。

- (1) a. [皿の上にあった]りんごをくすねた。
 b. [りんごが皿の上にあった]のをくすねた。

[]で示された従属節が，(1a)では主要部「りんご」を修飾する通常の関係節なのに対して，(1b)では主節動詞「くすねた」の意味上の目的語「りんご」が従属節の内にあるため「主要部内在型関係節」(internally-headed relative clauses)と呼ばれる。本章では，主要部内在型関係節と主節が合わさった文を「主要部内在型関係節構文」と呼ぶことにする。主要部内在型関係節構文については生成文法による統語論的研究のほか，意味・語用論的研究も近年さかんになされてきている(cf. 坪本 2014, 野村 2016)。

認知文法では，文法が言語使用から立ち上がるとする使用依拠モデルが採られる(Langacker 2000)。このアプローチは，文法の基盤を談話に求める P. Hopper, S. Thompson, J. DuBois らの機能主義言語学と親和的である。こうした研究を背景に，本章は日本語の主要部内在型関係節構文がどのような談話的基盤を有するかを考えることを目的とする。以下，第2節では，関係節の類型論を文処理の観点から動機づけることを目指した J.A. Hawkins の枠組み(Hawkins 1990, 1994, 2004, 2014)を概観し，主要部内在型関係節がどのように分析され得るかをみる。第3節では，文産出の観点から D. Biber

第1章

再帰と受身の有標性

長谷川明香・西村義樹

キーワード：主体，自分，事象構造，する目的，なる目的

1. はじめに

この第4部の第2章以降の分析対象は日本語の再帰代用形を含む文と日本語の受身であるが、この2つの現象には(通言語的にも)重要な共通点がある。すなわち、いずれも述語動詞の取る項の実現の仕方が有標であるという点である。井川論文で分析される再帰代用形(主として「自分」)を含む文においては、対応する無標の構文では互いに異なる指示対象を持つ主語と目的語が同一の指示対象を持つ。典型的な受身においては、対応する無標の他動詞能動文では主語として表現される agent 項が現れないか付加詞として表現される一方、能動文では目的語として表現される patient 項が主語に格上げされる。再帰代用形を含む文では項の指示対象が1つ少ないという点が、典型的な受身では項自体が1つ少ないという点が、対応する無標の構文とそれぞれ異なると言える。井川論文は、目的語が「自分」である場合の主語との同一指示性の本質を明らかにすることを目指す。その際、リアリティの度合いという概念が重要な役割を果たすことになる。張論文と田中論文は、日本語の種々の受身が agent を脱焦点化することによって patient を中心にして事態を捉えたとされる受身のプロトタイプとどのような関係にあるかを解明しようとする。

以下第2節と第3節では、それぞれ再帰と受身について、認知言語学(とりわけ認知文法)の観点から、次章以降で提示される論点への導入を試みたい。

2. 認知言語学における subjectivity

話し手が(言語化する目的で)何かを捉えるという営みにはどのような特徴

第2章

再帰代用形「自分」と Image SELF

—言語におけるリアリティをめぐる—

井川壽子

キーワード：自分，分身，属性読み，リアリティ，実体的存在

1. はじめに

本章では、主として、日本語の再帰代用形「自分」のありようについて観察しながら、言語におけるリアリティ（定延 2006 参照）の問題を考えてみたい。リアリティをことばでただちに定義するのは容易ではないが、たとえば、「いま・ここ」という時空間に実際に具体的に存在する対象について語っているのか、それとも概念的な意味合いでその存在について語っているのか、そして、そのような区別があるとすれば、人間言語はそれに対応しているのかを考えることは意義のあることであろう。木村（2014）は、現代中国語において、実体的存在への言及と概念的存在への言及という意味機能上の対立が構造上の対立として具現化するという事実を明らかにしている。本章では、日本語の再帰代用形に関しても、同様のことがいえる可能性はないだろうかという観点から、日本語再帰形のひとつである「自分」の照応現象をみていきたい。「自分」に関しては、先行詞の長距離束縛や主語指向性の有無、また、話者指示性(logophoricity)、共感度(empathy)、強調(emphasis)などの面から議論した論考は数多く存在するが、本章の試みは、それらとは異なった側面からの考察を目指したものである。

以下、第2節では、本章で考察の対象とする「自分」の意味的な制約の一端を観察し、第3節では、Faltz and Oehrle(1987)が提唱した「分身」(doppelgaenger)の概念と、2つの別個の表示レベル、すなわち、identificational level、および iconic level における同一性という考え方を導入する。第4節では、定延(2006)、定延・程(2011)が主張している言語におけるリアリティ、あるいは、リアルさの程度について、また、木村(2014)が説いてい

第3章

非情の受身の固有性問題

——認知文法の立場から——

張 莉

キーワード：非固有説、影響、視点、状態性、「動作、作用」

1. はじめに

日本語の受身には、固有の受身と非固有の受身が存在するとされている。非情物が主語になる受身（非情の受身）に関して、近代¹以前から日本語に存在するものが固有の受身だと考えるならば、近代以降に西洋語の影響を受けて発達したものが非固有の受身ということになる。

一方、意味的な観点から、利害²を表すかどうかを基準に固有と非固有を分けるならば、主語が有情者である利害を表す受身（有情の受身）が固有の受身で、利害に中立である非情の受身が非固有の受身ということになる。

非情の受身に関して、「非情の受身非固有説（以下、「非固有説」と略す）」³が唱えられているが、「固有」という用語が複数の意味で使われていることから明らかなように、受身文研究史において、「非固有説」の内実も一通りではない。近代以前に存在した非情の受身は、時代区分によって固有・非固有を分類する立場では固有とされるが、意味を基準とする場合、利害を表さないために非固有となる。

本章では、「非固有説」に関連する研究を整理し、この説が妥当ではないことを主張した上で、認知文法の立場から、日本語の受身の全体像における

¹ 日本語史の研究における時代区分は、上代（奈良時代以前）、中古（平安時代）、中世（鎌倉・室町時代）、近世（江戸時代）、近代（明治時代から戦前）、現代（戦後から現在）という6つに分けられる。上代と中古については、日本史や日本文学史ではまとめて古代語としているものも多い（岡崎・森 2016: 10）。

² 「利害」に関しては、後述する松下（1930）を参照されたい。

³ 「非情の受身非固有説」は奥津による命名である（奥津 1983: 66）。

第4章

日本語受身文を捉えなおす ——〈変化〉を表す構文としての受身文——

田中太一

キーワード：受身文，受影受動文，属性叙述受動文，主体化，変化

1. はじめに

日本語受身文は、しばしば、主語の指示対象が有情者であれば心理的影響を表し、非情物であれば属性叙述や物理的影響を表すと分析されてきた。このような分析には、有情者への物理的影響を表す受身文を排除する理論的根拠がないことや、受身文に共通する意味を捉え損なうことなどの欠点がある。本章では、受身文は主語の指示対象の〈変化〉を表す構文であるとする立場から、先行研究を検討し、受身文の統一的把握を試みる。

第2節では、益岡による受身文分類を概観した後、受影受動文を検討し有情者主語受身文に心理的影響のみを認める分析が維持し難いことを示す。第3節では、属性叙述受動文に関する先行研究を概観し、その問題点を指摘する。第4節では、「間主観的变化表現」に関する議論を参照し、属性叙述受動文を受身文の体系に位置づけなおす。第5節では、それまでの議論を踏まえ、受身文の意味を再検討する。第6節はまとめである。

2. 益岡による受身文の分類

益岡は Kuroda (1979)、黒田 (1985) が提示する、受身文を行為者マーカを基準に、二受身文と二ヨツテ受身文に二分する分析を発展させたモデルを用いて受身文を分析している¹。益岡の受身文分類は論文ごとに異なるが、まとめると以下ようになる。本章ではこのうち受影受動文および属性叙述受

¹ 益岡は言及していないが、Kuroda (1979) と黒田 (1985) は異なった分析枠組みを持つ。この点に関しては田中 (2017) を参照。